教訓が、いのちを救う。
3.11 DENSHO ROAD
2025 vol.17

被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード 縁 えにし

被害の実情と教訓を学ぶ場
名取市震災復興伝承館

- 楢葉町生涯まなび課の三浦寛己さん
- 釜石市立釜石東中学校
- 伝承ロードをゆく 第6回 宮城県仙台市若林区・青葉区
- 東松島市・佐藤山（おさとうやま）
- 経済再生を目指す第2県都 宮城県石巻市
- 気仙大工左官伝承館
- アクアマリンふくしま



津波防災対策ビューポイント
“みるーる天神”（福島県楢葉町）

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構



名取川の河畔にある名取市震災復興伝承館。一帯には散策路が整備され、散歩しながら景観も楽しめます

被害の実情と教訓を学ぶ場

名取市震災復興伝承館

名取市の閖上港の近く、名取川河口を望む地に2020年5月、同市震災復興伝承館がオープンしました。閖上地区は東日本大震災の津波で壊滅的な被害を受けた場所の一つ。伝承館の周囲は復興が進み、住宅街や市営住宅の他、観光施設などが立ち並びます。震災伝承施設も点在し、被害の実情と教訓、復興の歩みを発信し続けています。

名取市の津波浸水高は仙台空港のある下増田地区で12・3㍍、閖上港付近で9・09㍍を観測。海岸から最大約5・5㌔まで津波が侵入し、市域の28％に当たる約27平方㌔が浸水しました。市民の犠牲者は965人で、そのほとんどが閖上地区をはじめとする沿岸域の住民でした。

伝承館はあの日の記憶をはじめ、悲しさや悔しさをばねに未来へ向かって進む復興の歩み、地震・津波に限らずこれからも発生する災害への備えといった防災情報を広く発信する施設です。平屋建てでコンパクトながらも三つの展示スペースを設け、映像やパネル、実物の展示などで分かりやすく紹介しています。

震災前の町並み再現

エントランスを入ってすぐのエリアがコミュニティースペース。震災前の閖上地区のジオラマが目を引きます。町並みや人々の記憶を保存・継承することを目的にした『失われた街』模型復元プロジェクト」として神戸大学や仙台高専、仙台建築都市学生会議などが500分の1の縮尺で復元しました。町並みだけでなく、広大な田畑や活気ある海の雰囲気も表現しています。

シアタールームでは名取市の津波被害をパネル展示。震災と復興をテーマにした約5分の映像を大型モニターで流し、着席して観賞できます。地震、津波、風水害の災害が体感できるVRコーナー、閖上出身のイラストレーターが自身の被災体験や教訓を基に作成した被災シミュレーションすごろくの展示もあります。

展示スペースで目を引くのが水圧体感ドア。水深30㌢のドアを開けられるかを体験できます。幅80㌢のドアの場合、水深30㌢だと36㌔の水圧がかかります。水の中を歩いたときの水圧や重さを体験する下駄も大人用と子ども用を用意。防災グッズも現物を並べリュックに詰める体験ができ、復興の歩みを紹介するパネルも展示しています。

開館は4～11月が午前9時半～午後4時半、12～3月は午前10時～午後4時。火曜（祝日の場合は開館し翌平日休み）と年末年始は休み。入館無料。



所在地／宮城県名取市閖上東1-1-1
TEL022-393-6520

「反省がないと教訓を残せない」

名取市震災復興伝承館の高野俊伸さん
一般社団法人ふらむ名取代表理事の格井直光さん



「災害において反省がないと教訓が残せない。あなたにとっての教訓は何かを問いかけていきたい」と語る（左から）高野さんと格井さん

復興が進んだ閖上地区には現在、住宅街や市営住宅の他、観光施設の「かわまちてらす閖上」などが立ち並びます。一方で名取市震災復興伝承館、震災メモリアル公園、「津波復興祈念資料館　閖上の記憶」などもあり、震災の教訓を発信し続けています。

伝承館の高野俊伸さんと、年4回「閖上だより」の発行や震災語り部などで活動する一般社団法人ふらむ名取代表理事の格井直光さんは閖上出身。高野さんは震災時、自営業の傍ら消防団員として「とにかく命を助けないと」という思い一筋に活動。現在は伝承館の指定管理者となる名取市観光物産協会の職員として、施設の日常運営に当たっています。

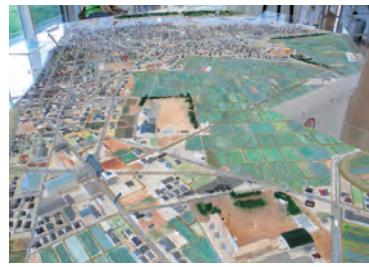
「閖上出身者が子どもや孫を連れて来館されます。両親が津波で亡くなり、なかなか閖上に来る気持ちになれなかった女性も来ました。皆さんジオラマの一部の家屋に、名前や屋号が書かれた小旗が立っているのを見てびっくりするとともに、もうすぐ15年という時の流れと懐かしさを実感されています」と高野さん。

ふらむ名取は新たな閖上地区のコミュニティー形成などに携わり、閖上だよりの前身となる「閖上復興だより」の発行をはじめ、市営住宅の管理組合の立ち上げにも参画しお茶会やイベントなどを企画。2018年と20年、21年には鎮魂や新型コロナ収束を願い花火も打ち上げました。格井さんは「復興の根底は自立であり、私たちの活動はそのお膳立て」と振り返ります。

能登住民、閖上で学ぶ

格井さんは伝承館と近くの震災伝承施設をフィールドにした震災語り部の活動にも取り組んでいます。「当初は真面目に聞いてほしいという思いが強かったが、小学生と中学生、高校生、大学生ではそれぞれ違いがあり、今はどのような団体がどのような思い、状況で来館されるのか事前の確認を心がけている」と言います。以前、格井さんの案内を受けた石川県奥能登の人たちが再び来訪し「地震の後には津波が来るということを閖上で学んだ」と言われたことが記憶に残るそうです。

閖上地区には大きな反省と教訓があります。それは震災前、長きにわたり「閖上には津波が来ない」という、ゆがんだ〝安全神話〟があったこと。高野さんは「チリ地震のときも津波は貞山運河まで、運河の西側には来ないといった根拠のない話が年齢の高い人ほど根付いていました。昭和三陸地震津波の石碑（現・震災メモリアル公園内）にも『地震の後には津波が来る』と書かれていたのに、誰も気付かないままでした」と残念がります。


震災前の閖上地区の姿を再現したジオラマ


「教訓」をテーマにしたパネル展示。「なぜ人は逃げなかったのか」にスポットを当て、震災時の住民の認識や行動などを紹介

「伝承館の展示は津波対策をしてこなかった。歴史をきちんと学ばないと、間違った情報がはびこってしまう」と高野さん。石碑は昔の語句で読み取りが難しいため、25年度中に説明板を付ける見込みです。

防災士の資格を持つ格井さんはハード面の整備が進んだことで、人々の慢心につながらないかを懸念しています。「7月のカムチャツカ半島地震の際も人々の反応は鈍かった。防災意識を高めないといけません。災害があったときはどうしても慌ててしまう。この慌てる時間を短くするためにも心の準備、物の準備、避難の準備が大切」と訴えます。

町の歴史を知り未来を創造

楢葉町生涯まなび課の三浦寛己さん

楢葉町は福島第一原発事故の影響でおよそ4年半の間、町への立ち入りが制限されました。コミュニティセンター内にあった歴史資料館も、長らく休館を余儀なくされましたが、2023年4月に「大地とまちのタイムライン」としてリニューアル。「大地」と「まち」の2つの視点で、地球や人類が直面してきたさまざまな危機を振り返り、これからの未来を歩む糧となる施設を目指しています。



「希望があれば施設内の案内も行います」と話す三浦さん。施設では東京大学総合研究博物館と連携した企画展や公開講座も随時開催しています

「大地とまちのタイムライン」は東京大学総合研究博物館と同町との官学連携で生まれた施設です。東日本大震災後、東京大学と放射能汚染調査などを通じて関わりを深めたことが縁で、同大の総合研究博物館と協定を締結し、2020年に施設の構想がスタート。23年に開館しました。

総合研究博物館が所蔵する学術標本を用いた「大地のタイムライン」のコーナーでは、「危機～再生～未来創造」をキーワードに据え、地球の誕生から隕石の衝突、火山の噴火、そして2011年3月11日の大地震まで幾多の危機を乗り越えて再生を果たしてきた様子を時系列で伝えています。

「まちとエネルギー」では、木炭から石炭そして原子力と、100年余りにわたる町のエネルギー産業の歴史を紹介。原子力発電所を誘致した背景や町に生み出した恩恵、そして原発事故についても詳細に記されています。

町民らの声を紹介

生涯まなび課主任主査の三浦寛己さんは楢葉町生まれ。震災当時は大学2年生でした。原発事故による全町避難で家族と共にいわき市に避難し、13年に楢葉町に入庁。財産管理課、復興推進課を経て20年に教育委員会に配属されました。

「震災伝承や復興に関する施設が県内に続々と設置される中、どのように差別化を図るのかが一番の課題でした。ここではいわゆる震災遺構と呼ばれる実物展示は行っていません。震災を今と捉えて、過去に地球や人類が直面してきたさまざまな危機を振り返り、どのように再生してきたか知ってもらうことで、未来に向けてどう歩むか考える場となることを目指しました」と施設の立ち上げから関わった三浦さんは話します。

展示の後半では震災を経験した町民らの未来へ向けたメッセージも映像で見ることができます。壁面には来館者が記した一言コメントが掲示してあり「過去を知り未来へ生かすことの大切さを知った」「福島＝被災地のイメージが強かったがそこには人の日常があり歴史があるということを改めて実感した」といった声が寄せられていました。

同施設には地元の小学生も毎年見学に訪れます。「私も二児の父となりましたが、これまで震災の経験を子どもたちに話すことはほとんどありませんでした。展示を通じて自分たちの町がどんな困難を乗り越えて今があるのかを知り、これからの未来を考えるきっかけにしてもらえたらうれしいですね」と話します。



所在地／福島県楢葉町大字北田字鐘突堂5-4 楢葉町コミュニティセンター1階
TEL0240-25-2492



東日本大震災直後の町の被災状況などが映し出されるプロジェクションシアター



初代会長の千葉心菜さん（右）と2代目会長の佐々木一真さん。9月の小中合同総合防災訓練を終え、課題などをまとめている最中の資料を紹介

生徒主体の自主防災組織始動

釜石市立釜石東中学校

釜石市沿岸部最北の鵜住居（うのすまい）地区にある釜石東中では、東日本大震災前から津波防災学習を行っていました。2011年の震災の津波で校舎は全壊し、内陸部の高台に移転して17年春に地域の防災拠点を兼ねた小中併設の新校舎が完成。25年2月には継続している防災の学びを生かそうと、生徒主体の自主防災組織を立ち上げました。

自主防災組織の25年度のメンバーは、全校生徒に教職員を加えた約100人。生徒主体の運営で、自主防災組織会長は生徒会長が兼任します。

以前から行っている津波防災学習は、同組織の設立をきっかけにアップデート。4月の防災オリエンテーションは1～3年生の縦割り組団で、校内にある自動体外式除細動器（AED）や備蓄倉庫を確認。教員による被災経験の講話が初めて行われました。講話した佐々木伊織先生は震災当時、中学2年生でした。「生徒と同じ年代で被災したので、当時の心境などを話しました。地域の被害状況を把握し、多くの支援があって今につながっていること、生きる術を学んでほしいです」と願います。

自主防災組織の初代会長で現生徒会長の3年千葉心菜さんは「震災の時、私は3カ月で記憶がないので、先生の体験談を聞いて勉強になりました」と話します。2代目会長で新生徒会長の2年佐々木一真さんは「世界の方々に支えてもらった分、今度は自分たちが支える側になりたいです」ときっぱりと語ります。

実践的な防災学習

6月の下校時避難訓練は地区ごとのグループで避難ルートを確認。小学生や地域住民を支えようと取り組みました。

9月の小中合同総合防災訓練は学校を会場に、中学生が支援者、小学生や地域住民が避難者と仮定して実施。佐々木さんは「1年生が炊き出し、2年生が誘導、3年生が避難所の立ち上げと班分けをして組織的に進めました」と説明します。千葉さんは「『炊き出しはいつ配ればいいのか』など、すぐ判断しないと現場が混乱します。先読みすることが大切だと思いました」と振り返ります。

小中合同総合防災訓練を終え、生徒会では成果をまとめ、学校の防災機能の強化を考えています。佐々木先生は「中学生のうちから防災意識を高め、支援できる大人に成長してもらえれば」と期待します。



7月のカムチャツカ半島沖地震津波で、学校に避難してきた住民に生徒が物資を配布

3・11伝承ロード推進機構 震災伝承施設紀行

伝承ロードをゆく

第6回 宮城県仙台市若林区・青葉区

取材／一般財団法人3・11伝承ロード推進機構　事務局長　種市 優

青森、岩手、宮城、福島の4県でツーリズムや、映像アーカイブなどの活動を行っている3・11伝承ロード推進機構の職員が「震災伝承施設」を直接取材。「3・11伝承ロード」の意義と役割を改めて考えながら、東日本大震災の教訓と災害への備えを学びます。



「慰霊之塔」と共に立つ慰霊モニュメントに、「絆」の文字と、犠牲になった方々の「ご芳名」が刻まれています

被災地域の交流拠点に

２０１７年に閉校し、六郷小学校と統合した仙台市立東六郷小学校の跡地に整備された「東六郷コミュニティ広場」を訪ねました。震災で亡くなった地域の方々の慰霊モニュメントが立ち、震災伝承施設第２分類に登録されています。

「学区民運動会も行われた東六郷小学校は地域の思い出、交流の場所でした」と教えてくれたのは、自身も東六郷小学校の同窓生という相沢和紀さん。広場の色付きタイル部分が、かつて校舎があった場所だといいます。

相沢さんが委員長を務める「東六郷コミュニティ市民委員会」が、広場と、隣接するコミュニティ・センターの維持管理を担当。東六郷の小学校区「井土」「二木」「種次」「藤塚（現在の久保田東）」に「三本塚」を加えた「六郷東部地域」の５つの町内会を中心に構成されています。

「六郷東部は震災前、５町内会それぞれに80～１００世帯が暮らしていた地域。押し寄せた津波で１２６人もの方々が亡くなりました。藤塚は災害危険区域に指定され、住むこともできなくなりました」と相沢さん。

地域の結びつきを取り戻そうと、委員会では年１回「ふるさと交流祭」を開いて交流を図っている他、住民有志による「わたしのふるさとプロジェクト」が毎年、このコミュニティ広場で鎮魂の花火の打ち上げを実施。地域の思い出を振り返るスライド上映なども行っています。

相沢さんが町内会長を務める二木町内会では多世帯住宅

「震災伝承施設」とは？

東日本大震災の事実や記憶、経験を伝承する「3.11伝承ロード」を構成する施設で①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当することが条件。①～⑤1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったりと、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりといった来訪者の理解しやすさに配慮している施設を「第3分類」としています。



1 仙台市東六郷コミュニティ広場
宮城県仙台市若林区二木字山王69
問／仙台市若林区まちづくり推進課
TEL022-282-1111

2 Smart Innovation Gallery（スマート イノベーション ギャラリー）
宮城県仙台市青葉区一番町2-8-25
NTT東日本仙台青葉通ビル1階
問／NTT東日本宮城事業部
TEL022-269-3027



◀衛星携帯電話やポータブル衛星電話を使って避難所に延べ1200カ所もの特設公衆電話を設置したことなど、当時のNTTグループの経験を写真パネルや動画などで紹介しています



▶広場の中に地域固有の遺伝子を持つ希少な「井土メダカ」が放流されたメダカ池もあります



▶かつて子どもたちが走り回った思い出の校庭は、スポーツ団体などの練習や試合会場に貸し出しています

の新築などで新しい住民が少しずつ増えており、新旧の住民たちの親睦を図るため24年から独自の「町民フェスタ」も開催。消防団や女性防火クラブの周知といった、地域の防災・自治力強化にも取り組んでいます。

〝つなぐ使命〟を学ぶ

仙台市地下鉄東西線青葉通一番町駅から徒歩5分。電話、インターネット接続といった通信インフラを担うNTTグループが、復旧・復興の経験や教訓、知見を次世代に伝えようと、2013年に開設した「スマート イノベーション ギャラリー」があります。

オープン当初はパネル解説による展示が中心でしたが、21年3月に映像音響システムも備えた展示施設としてリニューアル。同年7月20日に震災伝承施設第2分類に登録されました。

震災による津波はNTT東日本のネットワークインフラにも大きな被害を与え、広域かつ大規模な停電が電話やインターネットをつなぐ通信ビル約990棟を直撃。影響を受けた回線は東北地方を中心に約150万回線に上ったといいます。

「安定した通信サービスの提供は、私たちNTTグループの使命。〝つなぎ続ける使命を果たす〟ため、震災直後から全国のNTTグループが総力を挙げて復旧・復興に当たりました」と説明するのは企画総務部の千葉久司さん。

展示室では当時の様子をパネルや被災した実物資料で紹介している他、当時最前線で復旧・復興に当たったプロジェクトチームメンバーの貴重なインタビューを常時上映。予約なしで誰でも自由に見学できます。

私たちが日常的に享受している「電話やインターネットが当たり前につながる」生活も、多くの方々に支えられているおかげなのだと、改めて学ぶことができました。

スマート イノベーション ギャラリーの開館は午前10時～午後6時30分で日曜、祝日、年末年始は休館。入館無料。

「通信は、人と人をつなぐ命綱」

復旧・復興作業に当たったNTT-ME東北ブロック統括本部サービス運営部門災害対策室長の酒井克典さんに当時の経験を伺いました。



2011年3月11日、あの日の記憶は今も鮮明に残っています。数日前に起きた地震の嫌な予感が的中し、突如として地響きとともに激しい揺れが襲いました。事務所内ではFAX機や書棚が倒れ、数分間立っていられないほどの揺れに、通信設備にも大きな被害が及んでいるのではないかと直感しました。発災直後の数日間は、記憶が曖昧になるほどの混乱の中で、ただひたすら被害状況の確認と復旧に向けた作業を続けました。

通信インフラの重要性を痛感

津波の被害を実際に目の当たりにしたその破壊力と恐ろしさは、想像をはるかに超えるものでした。局舎ビルや通信ケーブルが広範囲にわたって被災したことで、多くの皆さまの通信手段が失われ、ご不便をおかけすることになりました。通信インフラの重要性を痛感しつつ、必死に復旧作業に取り組みました。現在、私は災害対策室に所属しています。あの震災での経験を教訓に、災害発生時にはいかに早く通信を復旧させるか、また平時においても地域の皆さまが安心・安全に過ごせるよう、いかに高品質で安定した通信を提供し続けるかが私たちの使命だと考えています。通信は、人と人をつなぐ命綱です。私たちは、あの日の記憶を風化させることなく「つなぐ使命」を胸に、日々の業務に取り組んでいます。

私財投じ、1人で避難所を整備

東松島市・佐藤山（おさとうやま）

「津波が来ないなんて、なぜ言えるんだ」。東松島市野蒜の佐藤善文さんは半ば反骨精神から、たった1人で山を切り開き、頂上に私設の津波避難所を完成させました。それから間もなく、東日本大震災の大津波が襲来。避難所に身を寄せた住民約70人の命を救ったのです。佐藤さんは備えが肝心なことを今も訴え続けています。



「佐藤山」から東松島市震災復興伝承館（旧野蒜駅）を望む

野蒜地区は緩やかな弓状の海岸が広がり、その背後には「余景の松原」と呼ばれる松林が続く風光明媚な観光地でした。夏は東北随一の海水浴場としてにぎわい、民家も立ち並んでいましたが、震災の大津波が襲い、壊滅的な被害となりました。

佐藤さんは1960年のチリ地震津波の際、「船が道路に上がっている様子などを見て、これはすごい威力だと実感しました」と振り返ります。62年にはタクシー会社を創業。しばらくの間、津波を忘れていたそうですが、夏の海水浴客や朝夕の野蒜駅の乗降客の多さを見て思い出しました。



私設避難所を造った佐藤善文さん

当時の行政に津波対策を尋ねても「津波は来ない」との認識。地区の背後には小高い山々が広がり「裏山に逃げればいい」という住民もいたそうです。「山があっても整備しなければ登れない。いずれ自分が津波に対応できる避難所を設けないと」と佐藤さんは決意。65歳の時に会社経営を息子に譲り、避難所設営に着手。まずは場所探しをした際、ちょうど山の所有者から売買の相談を受け、購入を決断しました。

震災で約70人の命救う

佐藤さんは「みんなに反対されながら1人でのスタートでした」と笑います。99年から10年余りかけて山を整備。4本の登山道を設け、標高30メートルほどの山頂にあずまやと小屋を設けました。

私費を投じて整備した苦労が実り、住民の間で「佐藤山（おさとうやま）」と呼ばれるようになった頃、震災が発生。佐藤さんが家族4人と犬を連れて避難したときには、すでに住民40人ほどが身を寄せ合い、最終的に約70人が不安な一夜を過ごしました。

避難所には、こまめに交換しておいた水を入れた20リットルタンク5個とストーブ2台がありました。「夜は漆黒の闇。焚き火の明かりを見つけたのかヘリコプターが旋回していた」。朝を迎え、がれきと化した地区の全貌を把握したそうです。

震災以降、隣接の東松島市震災復興伝承館とセットで国内外から多くの視察が訪れます。佐藤さんは震災の出来事を基にした絵本も自費で発刊。日本語版の他、英語、ロシア語、ベトナム語、インドネシア語の翻訳版もあります。

震災から間もなく15年を迎えます。現在92歳の佐藤さんは備えの大切さを強調します。「チリ地震津波で被害を受けたのに忘れたり、自分の地域はたまたま大きな被害がなかっただけなのに津波は来ないと言ったり。同じようなことが今後、再び起きないか心配。いつの世も備えは重要。津波はまた必ずやって来ます」と警鐘を鳴らします。



所在地／宮城県東松島市野蒜北針生1



山頂に続く避難路登り口の一つ。駐車スペースもある

「最大被災地」からの復興

経済再生を目指す第2県都　宮城県石巻市



旧北上川河口から望む石巻市街地。河川堤防や海岸防潮堤など多重防御施設を整備した

北上川の河口に位置する石巻市は、古くから漁業のまちとして発展し、川辺の風景を生かした観光も進められてきました。水辺とともに暮らす文化が根付いていたこのまちを、東日本大震災の巨大津波が襲いました。「最大被災地」と呼ばれるほど深刻な被害を受けながらも、市民は力強く立ち上がり、着実に復興を遂げてきました。東日本大震災から間もなく15年、宮城県第2の都市として石巻市は経済のさらなる発展を目指し、新たな未来へと歩みを進めています。



お話を伺った方
齋藤正美市長

石巻市の人的被害は死者3188人、関連死276人、行方不明者414人。市域の約13・2％に当たる73平方キロメートルが浸水し、建物被害は5万6000棟を超えました。

学校や病院、市総合支所などの公共施設も壊滅的な被害を受け、発災初期には電気や水道などライフラインも停止し、都市機能を復旧するまで長期間を要しました。

当時、齋藤正美市長は政治の現場から離れていたにもかかわらず、発生直後から地域の支援に奔走。命からがら避難してきた人たちを自宅に受け入れ食事を提供。毎日500個のおにぎりを握って避難所などに届け、全国から届いた支援物資の受け入れやボランティアへの寝床の提供にも力を注ぎました。

石巻市では2011年12月、「災害に強いまちづくり」「産業・経済の再生」「絆と協働の共鳴社会づくり」を理念とする「石巻市震災復興基本計画」を策定。防潮堤や高盛土道路、内陸への幹線道路、河川堤防・護岸の整備など、多重防御による災害対策を進めました。海岸には陸閘や水門の自動閉鎖システムも導入されています。



津波と津波火災の痕跡を残す唯一の施設「震災遺構門脇小学校」

住まいの再建では、津波被害地域の住居を内陸部や高台へ集団移転。土地区画整理や団地造成を行い、52地区約2000戸が移転し、復興公営住宅も4456戸整備されました。

齋藤市長は11年秋に宮城県議会議員として政界に復帰。復興庁に月2、3回は足を運び、国への直接的な働きかけを行い、石巻市の復興事業の実現に尽力しました。齋藤市長は変わり果てた古里を「このままにはしておけない、という使命感が原動力だった」と振り返ります。

教訓を学びに変える場に

市長就任後は亀山紘前市長の施策を引き継ぎつつ、震災のショックから立ち直れない市民への支援などソフト面にも力を注いでいます。地域経済の立て直しも喫緊の課題です。

「人口減少に拍車をかけた震災の影響を受け、医療・教育・住居・雇用の4本柱の整備が急務となっています。空き家バンク制度の導入や医療ネットワークの構築など、持続可能な地域づくりに向けた取り組みを進めていきたい」と齋藤市長。

産業面でも、被災企業の二重ローン問題や漁業・農業の担い手不足、海水温上昇による漁業環境の変化など、多くの課題に直面。国への働きかけも続けながら経済の再生を目指す考えです。

震災の経験と記憶を後世に伝えるため、石巻市では「門脇小学校」「大川小学校」の震災遺構を整備・公開。市内にはさらに、「石巻南浜津波復興祈念公園」や「がんばろう！石巻看板」など追悼と伝承の場が数多く点在します。

齋藤市長は「震災から間もなく15年を迎え、震災の記憶の風化が懸念されています。震災遺構や伝承施設を訪れ、実際目にすることで得られる教訓は、命を守るための学びとなります。最大被災地といわれた本市の復興の歩みも目にしていただき、防災教育や企業研修の場として多くの方に訪れていただきたい」と呼びかけます。

庭園にともる優しい灯り 海を見守り、被災者の心癒やす

気仙大工左官伝承館

陸前高田市の気仙大工左官伝承館は、広田湾を見晴らす絶景の地にあります。普段は波穏やかな広田湾ですが、東日本大震災では大津波が襲い、市街地を水没させる甚大な被害を及ぼしました。阪神淡路大震災の被災地だった神戸市から分けられた「3・11希望の灯り」が同館の庭園でともり、広田湾を静かに見守るとともに、被災者の心にも優しく灯りをともしています。





左から資料庫棟と主屋棟。手前には「3・11希望の灯り」

岩手県気仙地方（大船渡市、陸前高田市、住田町）で産出される気仙杉は軽くて柔らかく、加工しやすい木材として知られます。良質な杉が産出される地域だけに、古くから「気仙大工」と呼ばれる匠集団の古里としても知られます。そのような伝統と歴史を後世に残そうと1992年に気仙大工左官伝承館が開設されました。場所は広田半島の付け根に当たる箱根山（標高447メートル）の中腹。一帯は「市民の森」で、その一角に伝承館があります。

主屋棟は明治初期の庄屋を再現した木造かやぶきの平屋で、くぎを使わない組み込み工法で造られています。この工法は揺れれば揺れるほど組み込みの強度が増すといわれ、東日本大震災でも被害はありませんでした。資料庫棟は2階建ての蔵で壁の厚さは48センチ、二重屋根のため室温と湿度は年間ほぼ一定の重厚な造りです。

命と思いを結ぶ

震災では周囲が水没し、広田半島は陸の孤島と化しました。「伝承館は避難所ではありませんが、当時100人ほどが避難しました。少ない食料を皆で分け合うなどしてしのいだようです」とスタッフの及川定子さん。

その年の暮れには「広田湾を見下ろせる場所に」と、阪神淡路大震災を経験した俳優の堀内正美さんが当時代表を務めた「たすきプロジェクト」が、神戸の「希望の灯り」を分灯したモニュメントを建立。その灯りは現在まで消えることなく燃え続けています。

堀内さんの碑文の結びには「この灯りは奪われた すべてのいのちと 生き残った わたしたちの思いを むすびつなぐ」と書かれています。「3・11希望の灯り」として第2分類の震災伝承施設に登録され、犠牲者の追悼はもちろん現在は復興のシンボルになっています。

スタッフの小松ひとみさんは「希望の灯りがあることで関西から来館してもらうきっかけになっています。伝承館が何年たっても、訪れた人にほっとしてもらえる空間であれば」と話しています。



伝承館の語り部としても活動する（左から）及川さんと小松さん

開館は午前9時～午後4時で水曜（祝日の場合は開館し翌平日休み）と年末年始は休み。観覧無料。



展示館では気仙大工の歴史や精巧な技を紹介



所在地／岩手県陸前高田市小友町字茗荷1-237
TEL0192-56-2911

※第3分類（訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解しやすさに配慮している施設）のみ掲載

陸前高田市

- **東日本大震災津波伝承館（愛称:いわてTSUNAMIメモリアル）** 陸前高田市気仙町字土手影180
- **高田松原津波復興祈念公園** 陸前高田市高田町および気仙町地内
- **陸前高田市立博物館** 陸前高田市高田町字並杉300-1
- **タピック45（旧道の駅高田松原）** 陸前高田市高田町字古川28-5
- **気仙中学校** 陸前高田市気仙町字小渕202

被災状況映像交え紹介
震災学習に取り組む

アクアマリンふくしま

2000年に開館した「アクアマリンふくしま」は、本年25周年の節目を迎えました。東日本大震災では電源の喪失により飼育していた生き物の9割を失いましたが、国内外からの支援により約4カ月後には営業を再開。復旧・復興を遂げた現在は県内外から年間60万人が訪れています。



潮目の海をテーマに約800種の生物を展示。「わくわく・はじまりの森」「じゃぶじゃぶ・めぐりの海」など里山や海の環境を再現した屋外体験エリアも充実しています

小名浜港2号ふ頭に位置する「アクアマリンふくしま」は、震災による建物の倒壊や人的被害はなかったものの、地下にある電源設備が浸水した影響で、水槽内の水の循環や酸素の供給が滞り、飼育していた生き物約20万点のうち9割が死滅しました。

施設の立ち上げにも携わり震災時に館内で業務を行っていた館長の古川健さんは、「お客さまを避難誘導後、施設の状況を確認していたら津波が迫ってきたため、上の階に避難しました。駐車場に止めていた車が押し流される光景を見て『これは現実で起きていることなのか』と信じられませんでした」と振り返ります。

先行きが見通せず不安な状況の中でしたが「生き残った命を救わなくては」との思いで、千葉県の鴨川シーワールドに協力を要請。トド、セイウチ、アザラシなどの海獣や海鳥などが同館を通じて全国8カ所の動物園や水族館で一時的に飼育されることになりました。

「鴨川シーワールドをはじめ全国からさまざまな支援をいただき本当に助けられました」と古川さんは感謝します。

6月には全てのライフラインが復旧。一時的に自宅待機をしていたスタッフも復帰して施設再開に向けた準備に着手し、7月15日に再オープンしました。



2021年7月よりアクアマリンふくしまの館長と同施設を管理運営するふくしま海洋科学館の理事長を務める古川健さん

津波の恐ろしさ学ぶ

同館では教育普及活動の一環として、さまざまな学習プログラムの提供にも力を入れています。環境保全に関することや海にすむ生き物の生態など、さまざまなテーマが設けられていますが、そのうちの一つに「震災学習プログラム」があります。

アクアマリンふくしまの震災での被災状況や、直後に職員がとった行動、復旧・復興までの道のりなどについて、写真や映像を交えて紹介。市内外の小・中学生や高校生が受講し、津波の恐ろしさや防災への学びを深めています。

「今の子どもたちは震災を経験していないため、自分事として捉えるのはなかなか難しいかもしれませんが、実体験に基づいて次世代に伝承していくことは大切なことだと思います。近年はさまざまな災害が頻発していて、いつ自分の身に降りかかってもおかしくありません。その時に、ここで学んだことを思い出してもらえたらいいですね」と古川さんは話します。



震災学習プログラムは主に学校単位で実施しています。一般団体向けのガイダンスもあります



所在地／福島県いわき市小名浜字辰巳町50
TEL0246-73-2525

陸前高田市・いわき市の震災伝承施設

いわき市

- **アクアマリンふくしま** いわき市小名浜字辰巳町50
- **いわき市ライブいわきミュウじあむ「3.11いわきの東日本大震災展」** いわき市小名浜字辰巳町43-1
- **いわき市地域防災交流センター久之浜・大久ふれあい館** いわき市久之浜町久之浜字中町32
- **いわき震災伝承みらい館** いわき市薄磯3-11

Topics & Information

仙台湾岸エリア巡るバスツアー
2026年1月下旬実施予定
自然災害の備えと学びを体験
観光と防災 融合させた復興ツーリズム

周遊プログラム行程（コンテンツと主な内容）

時　間	行　程	備　考
9:00	【JR仙台駅（東口）】出発	
9:40～10:10	【仙台港中央公園】 （仙台港の復旧作業について）	・復旧
10:25～11:10	【震災遺構仙台市立荒浜小学校】 （被災状況などについて）	・伝承
11:20～11:40	【仙台市深沼海水浴場】 （海岸堤防の復旧について）	・防災
11:50～12:10	【避難の丘：冒険広場）】 （多重防御施設について）	・防災、観光
12:15～12:25	【津波避難タワー（井土地区）】 （避難タワーについて）	・防災
12:30～13:20	【アクアイグニス仙台】（昼食）	・観光
13:30～14:00	【名取市震災メモリアル公園】 （日和山、慰霊碑について）	・伝承
14:05～14:35	【名取市震災復興伝承館】 （震災前のジオラマ、被災映像、水圧体験ドアなどについて）	・伝承
14:45～15:30	【かわまちてらす閖上】 （自由見学）	・復興、観光
16:10	【JR仙台駅（東口）】到着	

仙台湾岸エリアは東日本大震災後、災害危険区域に指定され、JRフルーツパーク仙台あらはまやアクアイグニス仙台、閖上かわまちづくり事業など観光系の施設整備が進み、仙台空港からも近くインバウンド需要も高まっています。

同エリアには津波の多重防御施設、震災伝承施設といった防災や伝承系の施設整備も行われ、県内外から防災学習に活用されています。観光と防災・伝承の連携を図り、楽しい収穫体験とおいしい食との出合い、自然災害の備えと伝承の学びを体験できる、これまでにない地域の魅力あふれるプログラムとして、インバウンドにも対応できる観光と防災を融合させた復興ツーリズムを体感できます。


仙台塩釜港（仙台港区）


震災遺構仙台市立荒浜小学校


アクアイグニス仙台


かわまちてらす閖上

※旅行詳細については後日、近畿日本ツーリスト㈱仙台支店より公表予定

表紙
被災地を歩く

岬から望む海 今も変わらず

津波防災対策ビューポイント
“みるーる天神”（福島県楢葉町）

福島県の浜通りはビーチが広がるなだらかな海岸線をイメージしがちだが、思いの外、断崖が多い。楢葉町には太平洋が一望できる天神岬がある。一帯は季節を問わず自然が満喫できるスポーツ公園として整備されている。

木戸川河口に面した展望デッキの“みるーる天神”からは視界が開け、津波被害の大きかった前原・山田浜地区が眼下に広がる。この展望デッキは津波防災対策ビューポイントでもあり、第2分類の震災伝承施設に登録されている。

「東日本大震災復興記念碑」として震災の記憶と教訓を忘れることなく、復興への「願い」と「希望」の思いを表した美しいモニュメントが建立されているほか、津波について学べる設備もある。案内板には震災前の景色や大津波（推定10.5㍍）が押し寄せた様子の写真を掲載し、津波発生のメカニズムや特徴などもイラストで分かりやすく紹介している。

震災で楢葉町は震度6強を観測し、津波の浸水面積2.87平方㌔、被害住宅125戸を数え、13人の尊い命が奪われた。展望デッキからは新しく整備された防潮堤や防災林を望み、震災直後の面影は見当たらない。震災から間もなく15年。震災や原発事故の影響は何らかの形で今もなお残るが、眼下に広がる海の青さは震災前と変わらない。



所在地／福島県楢葉町大字北田字上ノ原27-29（天神岬スポーツ公園内）

伝承ロード縁　2025年12月11日発行
発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構　編集・制作／株式会社クリエイティヴエーシー

記事を見ての感想、取り上げてほしい話題など、ご意見をお寄せください。　✉ info@311densho.or.jp　FAX022-393-4271

無料